

81

家事労働と労働の違いは？

主婦論争

専業主婦の増加と女子労働市場の拡大

戦後日本経済の高度成長とともに増加し、中心的な社会階層を占めるに至ったサラリーマンは、大半の生涯を職場で過ごす。そのことから、家庭は妻に任せがちとなる。妻は人生の主たる拠点を家庭に置いて家事や育児に従事する。こうして夫と妻の関係は、産業社会が進展するとともに、職場・仕事と家庭・家事育児という一組の男女の性別役割分担関係として再編される。主婦とはこの再編を身に受けた多くの妻たちの別名である。

この専業主婦をめぐる、高度経済成長期にさしかかる頃早くも論争が起きた。当時のジャーナリズム

のなかで、この論争に最も多く関わったのは『婦人公論』である。時期的盛り上がりは、初めは一九五五年（昭和三〇）から五七年にかけて（第一次論争）、次に一九六〇・六一年（第二次論争）にあるが、これらに加えて一九七〇年代以降も一連の展開の連続面に位置づける見解もある。論客は、六〇年代までに限っても、関連文献を加えれば、評論家、主婦、経済学者ら男女延べ八〇名を越えた。従来の女性解放論と交錯しつつも、この論争は、新たな主婦概念の模索を通じ、敗戦後の日本が産業社会へと変身しつつあったことを示している。

第一次論争は、石垣綾子が「主婦という第二職業論」（『婦人公論』一九五五年二月。以下同誌名・年次は略）で、夫にたよって生きる主婦の怠慢を批判し、女の目指す理想として家庭と職場の両立を掲げたことに始まった。これに対し坂西志保は、「主婦第二職業論の盲点」で家庭運営の大きな責任を負った主婦の功績を主張する一方、いたずらに男と競争す

ることへの拒否を示した。石垣の主婦批判は、戦前期に与謝野晶子が提起した経済的自立論の系譜に属する。しかし歴史段階は、晶子の時代と異なり、男女平等を謳った新憲法成立や民法改正を経過しており、因習からの女性解放が一段と進展したことに加えて、事務職の若い女性社員の労働市場が開かれ、女の人生のワンステップに職場経験を加えることが一般化する時代となっていた。女が職業をもつことは、理念を超えて、現実的な持ち方の問題だった。主婦第二職業論がいう家庭と職場の両立は、この状況に新たな課題を提起したことを意味する。しかしそれが家事軽視の意見を含んでいたために、坂西の批判を誘発したのであった。

戦後の経済成長が続き、女子労働市場が拡大する一方で、家庭責任を担う産業社会の主婦像もまた明確になりつつあった。清水慶子「主婦の時代は始まった」は、主婦はマッスでありゼネストすれば大きな力になると主婦パワーを誇示した。ほんの十年前

まで、無権利状態のまま銃後で夫や息子の無事を祈った女たちが迎えた戦後の平和と民主化とは、ほぼそのまま、子供、生活、平和を守る主婦行動の転機となった。一九五五年は多数の主婦が参加した第一回原水爆禁止世界大会と第一回母親大会の年でもあった。また前年の家族制度復活阻止に果たした主婦層の役割も含めて、新しい主婦像の模索には、政治的地位の向上・組織化意欲も媒介となっていた。戦前以来の活動経験をもつ平塚らいてふも、「家庭婦人も：社会、政治に開眼」（「主婦解放論」）したことを評価している。

しかしこうした半面、職業との両立論は宙に浮いた格好になった。現在の主婦の存在・位置を前提にした問題の立て方をしているという嶋津千利世の批判（「家事労働は主婦の天職ではない」、あるいは社会環境の方を先に変革する必要性があるという批判（田中寿美子「主婦論争とアメリカの女性」、嶋津）も発表されたものの、両立論の論点が深められるこ

ともないままに、論争はしだいに主婦肯定・解釈論の傾向を強めていった。

主婦肯定論の増加傾向に与って力あったのは、男性参加者たちの発言である。福田恆存は「誤まれる女性解放論」で、女性論客たちに「生産Ⅱ職業Ⅱ男性Ⅱコムプレックス」があるとし、幸福や愛情こそが重要だと主張した。関島久雄「経営者としての自信を持つ」は主婦第一職業論を主張し、大熊信行も「家族の本質と経済」、「主婦の思想」で石垣の見方を経済学的であると批判し、反営利主義立場から家族本質論の必要性を説くとともにこれと主婦論との不可分性を強調した。また都留重人は「現代主婦論」で、〈労働の非効用〉の考え方を半面教師的に紹介して主婦の仕事（家事労働）を意義付け、また主婦の余暇の有効活用を推奨した。やや異質であったのは梅棹忠夫である。梅棹は現代サラリーマン家庭の原型を封建武士の家庭に見いだし、家事労働を主婦権確立のために主婦が必要とした発明品であるという一種

戦略論的主婦論の解釈を示し、女主導の家庭文化発達論に及んだ。しかし結局、主婦肯定論ではなく男と女の間質化を展望している。

五六年から五七年に集中したこうした主婦肯定・解釈論の論議のなかでは、生活実感から嘆く主婦の割り切れなさ、主婦と女性有職者が一つになれる土台創りの必要性を説いた丸岡秀子の論議も、最後に退く印象は拭えない。

経済問題としての主婦労働

第二次論争は一九六〇年の磯野富士子「婦人解放論の混迷」(『朝日ジャーナル』)が発した主婦労働無価値論への疑問に始まった。議論は多く家事労働論に集中し、荒又重雄らマルクス経済学の賃労働理論家は結局、主婦労働を交換価値を生まない生産的労働ではない「無価値」とみなした。むしろだからといって主婦労働が経済活動としての一面をもつことは誰もが否定しえないだろう。しかし、主婦の無償

労働を介した低賃金構造の問題等(渡辺多恵子「労働者と母親・主婦運動」)、マクロ的視点からの経済的論議はあったものの、主婦労働の実体に即した新たな労働論の展望は開かれなかった。一方、理論というより運動論では、賃金問題への主婦意識の誘導や労働運動と母親・主婦運動との連携問題等、啓発的論議が散見される。

概して第二次論争は、マルクス主義を思想的底流に、「主婦」を経済問題として浮上させたといえる。そこには水田珠枝による女性解放論の認識と方法の整理の呼びかけ(「主婦労働の値段」)も含まれてはいたが、さまざまな見解が交錯するなかで、主婦論争が何らか統一的な収束を得たわけではなかった。

主婦論は、繰り返される論議を通じて、主婦という存在の肯定と否定という微妙な両極を揺れ動き続けている。そのときどきの各主張の知的背景はさまざまであるが、産業社会の発展・成熟とそれに伴う知的状況が、社会的存在としての女にもたらず揺れ

を基本的に規定している側面は見逃せない。第一次論争は、女を労働市場に引き出す産業の力と同時に、家庭という労働力の供給源を安定化させる夫婦性別分業の定着という産業の力に規定されていた。第二次論争は、生産の諸法則を貫く「価値論」ゆえに「無価値」にならざるえない産業社会固有の主婦の困惑を象徴している。そして一九七〇年代に入ると、「主婦こそ解放された人間像」（武田京子）という肯定論が再度出現する。この背景には、労働が人を歯車に変え疎外する産業社会の翳りがある。

時代は「生産」から「生活」への転換を始動させた。性別分業が、夫と妻の固定的役割分担の要素を基本的に存続させる限り、主婦論争は不断に再生するであろう。

（福田）